



# 川内の里だより

令和8(2026)年1月1日 発行 第86号



新年のご挨拶

施設長 岡田 栄一

2025年の流行語大賞は「働いて働いて働いて・・・」でした。

1年前の大賞は「ふてほど(不適切にもほどがある)」でしたが、覚えている方はおられますでしょうか。令和の世の中は、滅私奉公、モーレツ過労の時代を経て「ゆとり、働き方改革」へのパラダイムシフトが進んでいます。

前年のこの川内の里だよりで冒頭紹介させていただいた、ある人物の生き様は、令和の人からすると、ふてほどに働き働き続けた過去の遺物でしかないかも知れませんが、先の封建時代の価値観からすれば、見事に価値転換が果たされていたように思います。前回の続きをこの場を借りて紹介させていただきます。

「呆けて歩いてるんじゃねえ」

前を担いでいる方の男が、怒鳴りつけた。

駕籠に、突き当てられたのであった。

「気をつけろ」

少年を怒鳴りつけてしまうと、二人は駕籠を再び肩に担いだ。少年は、怒鳴られただけで済んだことに安堵しかけた。が、すぐに体が震えだした。

売り物の豆腐を落とした。売上銭はない。このまま家に帰ると、どのような仕打ちが待っているか。

少年は恐怖で気を失いかけた。次の瞬間、先頭の駕籠かきの膝下にすがり付いていた。

「豆腐買うてください、たのんます、たのんますっ」

嘆願する声までが震え、呂律も殆ど回っていなかった。

駕籠かきはしばらく、足元にすがり付く少年を見下ろしていた。そして、少年の襟首を鷲掴んで顔を近づけると、また大声を出した。

「てめえがぼんやりしてたのじゃねえか。おれらが何べん、どけと行ったと思う。それをてめえは、道のど真ん中を、その棒を振り回してうろついていたのじゃねえか」

しかし少年も必死である。駕籠かきの形相にひるみながらも、なおも食い下がった。

「たのんます、豆腐買うてください、たのんます、たのんますっ」

駕籠かきは少年を突き飛ばした。

「こっちは急いでいるのだ。地べたに落ちた豆腐なんぞ食べやしねえじゃねえか」

少年は目に涙をためながら駕籠かきの袖を掴んだ。

「洗いますから、洗いますから、拾って洗いますからっ」

駕籠かきは呆気に取られた。が、一層語気を強めて怒鳴った。

「しつこいっ、どけっ」

「洗いますから、たのんます、たのんますっ」

そうしていると、駕籠から中年の侍が、のっそりと顔を出した。

すぼめたような唇の男であった。鬚は見るからに固く整えられ、月代が光沢を帯びている。この人なら、豆腐を買い上げてくれるかもしれないと、何となく思われた。

しかし、一見、虫も殺さぬ顔立ちに見えたこの侍は、見る間に顔を紅潮させて、腰の大刀の柄に手をかけた。一心不乱に食い下がっていた少年は、それをみて腰を抜かした。

侍は早口に口走った。

「通行の邪魔立てを致すと切り捨てるによって、そこに直れ。直れ」

少年を見据える侍の眼がいつぱいに見開かれている。二人の駕籠かきは、一言も発しなかった。そのま

ま四人は雨の降る街道の上、身じろぎ一つしなかった。どれほどの時間睨みつけていたか、やっと侍は少年から目をそらし、手を大刀の柄から放し、再び駕籠に乗り込んでしまった。その横顔には、すぼめたような唇が突き出していた。もう少年には目をくれようとはしなかった。

駕籠かきたちは無言のまま駕籠の前後に付くと、今度こそ駕籠を担ぎ上げ、掛け声をかけはじめた。後ろを担いだ男が、走り出す刹那にちらりと、まだ動けないでいる少年に目をやった。

また長い時間が経った。

ようやく彼が人心地ついたときには、件の駕籠は、雨霧に煙る街道のはるか彼方に遠ざかっていた。殺されずに済んだ、助かった安堵が押し寄せてきた。また、売り物の豆腐を台無しにして家に帰って殴打されるといふことにも、さほどの恐怖を感じなくなっていることに気がついた。早鐘のように拍動していた心拍も、穏やかに落ち着いてきた。

座り込んだまま、周囲を見渡す。暮れかかり一層仄暗くなってきた田野は、雨に濡れてしまった稲架が所々に佇立しているだけである。街道は他に往来もなく、雨の音しか聞こえない。

少年は放心して、泥道に散乱した豆腐を見ることもなしに眺めていた。しばらく眺めていると、今度は急に空腹を覚えた。

我慢できないほどではなかった。飢えているのはいつものことである。しかし、なぜかこの時は、目の前の泥豆腐を、口に入れてみようという気になった。

少年は膝をついたままにじり寄ると、泥にまみれた豆腐を、両手でそっとすくい上げた。充分食えるじゃないか、と彼はつぶやいた。

泥砂を噛みながらぼそぼそ豆腐を咀嚼しているうちに、先の侍の顔が思い出された。乱れない鬚、光沢のある月代、すぼめたような唇。

怒るような人には、とても見えなかった。

少年は次第に泣き出した。耐え切れなくなり、嗚咽して泥道に顔を突っ伏した。泣きながらなお、豆腐を口に運び続けた。そして、何べんも何べんも、叫んだ。

おぼえてろ、おぼえてろ、おぼえてろっ。

絶叫は、静まり返った田野に、降り止むことのない雨霧を切り裂いて、響き渡っていった。

その絶叫を聞いた者は誰もいない。しかしそれは後の明治の銅山王、古河市兵衛の産声であった。

(次回)

